

自然復元の観点から見るランドスケープ副読本制作

田中 章 研究室
1231204 矢野 沙季

1. 作品背景と目的

人類が最初にランドスケープを認識し、後世に残したのが絵画芸術である。古来から人間は場所との関わりの中でランドスケープを認識し、自然の美や農民の生活風景など描かれてきた。そしてオランダにて、海外貿易が成功し風景画が普及し、ランドスケープ (landscape) の語源である、ラントシャフト (landschaft) に影響を与えることになった。ラントシャフトは本来「地域」という意味であったと言われていたが、風景画 (landschaftsmalerei) により、農村を中心に自然と人の営みを示す描写する対象から描写された結果へと、捉え方が変わり風景という意味合いが強くなっていった。

一方、同じく人間はメソポタミア文明やエジプト文明、古代ペルシアの時代から、「オアシス」や「楽園」のような空間を求めた。ガーデン (garden) は、「gan:守る、囲われる」という意味と、「eden:愉しみ」という意味からなり、文字通りに高い塀や垣で囲った安全な空間に緑陰、水、花、果実、魚、鳥などによる生きられる景観と安心の空間を庭園として創出した。そして、古代ギリシャの「アルカディア」、キリスト教の「エデンの園」、イスラム教の「パラダイス」、中国の「桃源郷」、仏教の「浄土」のように世界各地で独自の思想、風土に根差した庭園がつけられてきた。そして、イスラム庭園や安土・桃山期までの日本庭園など囲われる庭が主流であったが、15世紀のイタリアで囲われた内向きの庭園から、外に向けたものになり、プロポーションと遠近法という新しい概念を取り入れ、家屋と庭園は一つの存在物として一体となって機能し、周りの風景と庭園が結びつけられるようになった。フランスでは、自然に対し、庭師が自然を従えようとし、支配者はさらに熱心に自分の力を庭園で示すようにした。

17・18世紀のイギリスでは、整形形式庭園の不自然さに批判が高まり、牧草など田園風景をモデルとし、ゆったりとした起伏のある台地に、林や芝生が広がる風景式庭園が誕生する。風景をつくるという考え方は、日本でも回遊式庭園などに多い借景式庭園で生まれている。

19世紀以降になると、造園形式上はイギリス風景式庭園の景観・空間構成を継承しつつ、市民に向けた造園が主流となる。産業革命による環境悪化の対策として、王室の庭園が市民に開放されるようになり、公園がつくられていった。税金によって自治体が初めて作ったバーケンヘッドパークは、後にセントラルパークのデザインを手掛けることになるアメリカのフレデリック・ロウ・オルムステッドに影響を与えた。身分に関係なく市民が誰でも楽しめる緑の空間が存在することに感銘を受け、民主主義の国アメリカにこそ、人種や身分に関係なく誰もが楽しめる公共空間が必要だと考えるようになる。そして、アメリカにて自治体が整備する公園として、オルムステッドによりセントラルパークが完成し、植物、交通、建築など様々な要素を取り扱うランドスケープアーキテクチャーという分野が誕生し近代ランドスケープデザインの幕が開けた。閉じられた私庭園から、一般市民のための開かれた公園に展開し、20世紀の前半は芸術のモダンニズムがランドスケープに普及し新たな庭園、庭の概念が誕生した。また急激な人口増加によりニュータウン開発が進み、効率よく大規模な仕事をやり遂げるランドスケープの設計事務所が次々に誕生した。20世紀の後半は工業化の拡大による自然破壊や環境問題を解明する手法として、エコロジカルな考え方や計画プロセスがランドスケープデザインに加えられた。そしてこれからのランドスケープデザインは、自然の回復や復元を目的とした、エコロジカルな手法を用いつつ、人間が快適に過ごせる空間や、人と自然の共生の観点からのランドスケープデザインが求められる。そのためには、まず人と自然の関係を基本から見直し、自然に生きるものの仕組みを理解することが必要であると考えられる。そこで、エコロジーの観点から環境創造の様式が打ち立てられるよう、将来自然復元や創造に携わる人が使うような副読本の作成を目標に据え、自然復元の観点から、今までに人類が経験してきた自然との関係とおもなランドスケープの系譜をまとめ、副読本を制作することを目的とした。

表 1 卒業作品基本情報

卒業作品基本情報	
タイトル	人の快適性（アメニティー）の観点から見るランドスケープ
制作期間	平成 27 年 4 月から平成 28 年 1 月
制作目的	エコロジーの観点から環境創造の様式が打ちたてられるよう、将来自然復元や創造に携わる人が使うような教科書の作成を目標に据え、今までに人類が経験してきた自然との関係をまとめ、副読本を制作すること
内容 (目次)	第一章 人と自然の関わりからの観点からの庭園と近代のランドスケープ 1. 1 古代の庭園と自然思想 1. 2 内向きの庭園スタイル（イスラム庭園・中国庭園・日本庭園） 1. 3 外向きの庭園スタイル（イタリア庭園・フランス庭園） 1. 4 自然を模倣した風景式庭園と借景式庭園（イギリス庭園・日本庭園） 1. 5 近代ランドスケープの幕開け 1. 6 自然思想や公園の誕生と理想都市の実現 1. 7 ランドスケープのモダンニズム 1. 8 人口増加に伴うランドスケープの設計事務所の誕生 1. 9 環境技術を基にしたランドスケープエコロジーとランドアート 第二章 今後のランドスケープ
この作品からわかること	①. 世界の各庭園の概要や構成 ②. 近代のランドスケープの系譜 ③. 今まで人類が経験してきた自然との関係性について
参考文献	森山ら（2007）ランドスケープアーキテクチャーの起点. ぎょうせい ペネロピ・ホブハウス（2014）世界の庭園歴史図鑑 岡田憲久（2008）日本の庭. 東京印書館 進士五十八（2005）日本の庭園. 中公新書 日本造園学会（1996）ランドスケープの展開. 技報堂出版 「造園がわかる」研究会（2006）造園がわかる本. 彰国社 宮城俊作（2001）ランドスケープデザインの視座. 学芸出版社 宮脇勝（2013）ランドスケープと都市デザイン. 朝倉出版 記紀と神社をめぐる会（2015）ニホンの神様・聖地マップ. メイツ出版 武内和彦（2006）ランドスケープエコロジー. 朝倉出版 岩切正介（2008）ヨーロッパの庭園 美の楽園をめぐる旅. 中公新書 建築史編集委員会（2009）コンパクト版建築史 日本・西洋. 彰国社 武田ら（2010）テキスト ランドスケープデザインの歴史. 学芸出版社 進士ら（1994）ルーラルランドスケープデザインの手法. 学芸出版社 武内和彦（1994）環境創造の思想. 東京大学出版会 宮城俊作（2001）ランドスケープデザインの視座. 学芸出版社 進士ら（1999）風景デザイン. 学芸出版社 山下柚実ら（2011）五感で楽しむまちづくり イーファー・トゥアン（2008）トポフィリア 人間と環境. ちくま学芸文庫 チャールズ・ウォールドハイム（2010）ランドスケープ・アーバニズム. 鹿島出版会 山崎亮（2011）コミュニティーデザイン 人がつながるしくみをつくる. 学芸出版社

2. 日本の自然思想

日本の自然思想は縄文の時代から始まる。縄文時代の人々は、主に狩猟や漁労、植物採取による自然の恵みを得て生計を立てていた。一方で、自然は時に地震や火山の噴火、落雷などといった災難を起こす自然に対して感謝の念と恐れを抱き、身近にある自然を「精霊」として崇拝した。例えば、森や巨大な木には神が宿る場として鎮守の森として祀った、巨大な岩や石には神が降りてくる場として印付け（磐座）をした。この自然崇拝の行為は後の日本庭園の表現に影響を与えた。

11 世紀後半には、日本庭園は独自の庭園設計スタイルを開発している。その特徴として海や島、山を象徴するために池、湖、小島を配置した。池の中の島はそれぞれが違いを持つように配置され、海は小石で土と水の境界をつくり砂浜を象徴した。このようにして、広大な自然は日本人の表現力や審美眼と通じて、より身近なものとなりいくら自然が災難を起こしても、絶えず自然の美を賞賛してきた。

3. 今後の日本のランドスケープ

今後の日本のランドスケープのキーワードになるのが、自然復元や創造を目的とした、ランドスケープ計画である。開発行為や自然災害による環境の錯乱をエコロジカルなデザインの基点に据えるならば、その具体的な展開はまず、攪乱によって消失される自然に対する代償措置（ミティゲーション）を講じるところから始まる。土地開発が自然環境に与える影響を予測しつつ、開発と保全の間のバランスを達成するためのデザイン的な処方箋を準備することが求められる。また、その代償措置（ミティゲーション）を行うには地域住民が必要不可欠である。そのため、市民参加型のマネジメントに力を入れるべきだと考察する。現在では、公園内の里山を利用して様々なプログラムを提供する NPO や、来場者に公園を案内するガイドボランティアチームが組織化され、テーマに特化したコミュニティーがパークマネジメントの新たな展開を模索している。